

白石市文化財報告書第12号

鷹巣古墳群発掘調査概報

宮城県白石市教育委員会

白石市鷹巣古墳群発掘調査概報

序

白石盆地の中心に位置する鷹巣古墳群は、この地方を開拓した先駆者たちの墳墓の地と考えられ、古くから大切に保存されてきました。

ところが、これら古墳の所在する丘陵の一角を削平して団地の拡大が計画されたため、これによってかなりの古墳が影響をうけるものと予測されました。そこで、これらの保存について再三に亘り協議がなされた結果、一部は発掘調査を行ない記録保存の処置をとることも、やむを得ないと判断し、緊急発掘調査を実施することにしました。

これらは、その調査の報告書です。

本書は、白石市の郷土史はもちろん、東北地方の上代史を究明するうえでも、重要な参考資料になると思いますので、ご活用願えれば幸甚に存じます。

最後に、この発掘調査のためにご尽力いただいた宮城県教育庁文化財保護室調査係長志賀泰治氏をはじめ、同室職員、白石市文化財保護委員中橋氏、白石高等学校郷土研究班諸君、ならびに調査協力者各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和47年5月

白石市教育委員会教育長 小沢五郎

目 次

序 文 白石市教育委員会教育長 小沢五郎
本 文 宮城県教育庁社会教育課技術主査 志間泰治

1. 調査要項	2頁
2. 発掘に至るまでの経過	3
3. 古墳研究史(付関係文献)	6
4. 古墳群の位置と分布	8
5. 古墳各説	14
18号墳	14
位置と封土	14
内部遺構－箱式石棺	15
出土遺物	16
19号墳	21
位置と封土	21
内部遺構－横穴式石室	21
出土遺物	22
48号墳	26
位置と封土	26
内部遺構－横穴式石室	26
出土遺物	27
12号墳(瓶ヶ盛古墳)	29
15号墳	29
16号墳	29
17号墳	29
20号墳	32

21号墳	32頁
22号墳	32
6. まとめ	34
挿図 第1図 鷺巣古墳および周辺の古墳位置図 1頁	
第2図 鷺巣古墳群分布図	10~11
第3図 鷺巣古墳群地形図	12~13
第4図 18号墳地形および断面図	16
第5図 18号墳箱式石棺蓋石出土状況実測図(上)	17
18号墳箱式石棺と遺物出土地点(下)	17
第6図 18号墳横断面図	18
東西トレンチ断面(上)・南北トレンチ断面(下)	18
第7図 18号墳出土石製模造品(曲玉、有孔円板、臼玉)	19
第8図 18号墳出土石製模造品(臼玉)および鐵鏡	20
第9図 19号墳地形および断面図	23
第10図 19号墳横穴式石室実測図	24
第11図 19号墳出土遺物(金環、刀子、須恵器大甕)	25
第12図 48号墳地形および断面図	27
第13図 48号墳横穴式石室実測図と出土直刀	28
第14図 瓶ヶ盛古墳(12号墳)・15・16・17号墳地形および断面図	30~31
第15図 20号墳地形および断面図	32
第16図 21・22号墳地形および断面図	33

図 版

写真 1. 白石盆地航空写真(国土地理院承認番号附47第6152号) T O -70-8 Y C 8 B -10-	36頁
2. 鷺巣丘陵全景(達平丘陵より撮影)	37
3. 鷺巣丘陵全景(谷津川遺跡より撮影)	37
4. 鷺巣丘陵遠望	38
5. 瓶ヶ盛古墳	38
6. 瓶ヶ盛古墳遠望	38

写真 7. 18号墳全景	39頁
8. 18号墳全景	39
9. 18号墳全景	39
10. 18号墳箱式石棺蓋石出土状況	40
11. 18号墳箱式石棺	40
12. 18号墳封土断面写真	41
13. 18号墳封土断面写真	41
14. 18号墳箱式石棺側面写真	41
15. 18号墳石製模造品出土状況	42
16. 18号墳石製模造品出土状況	42
17. 18号墳出土石製模造品	42
18. 18号墳出土鉄鎌	43
19. 18号墳出土埴輪円筒破片	43
20. 48号墳出土直刀	43
21. 19号墳横穴式石室全景	44
22. 19号墳全景	45
23. 19号墳の発掘	45
24. 19号墳横穴式石室	45
25. 19号墳内須恵器大甕出土状況	46
26. 19号墳内刀子出土状況	46
27. 19号墳鉢石上出土金環	46
28. 48号墳発掘前の状況	47
29. 48号墳表土を剥離した状況	47
30. 48号墳横穴式石室羨道前庭部積石状況	47
31. 48号墳石室	48
32. 48号墳石室	48
33. 48号墳直刀出土状況	48
34. 48号墳出土青銅製管状製品	48
35. 瓶ヶ盛古墳全景	49
36. 17号墳全景	49
37. 15号墳全景	49

写真 38. 20号墳全景	50 頁
39. 21号墳全景	50
40. 22号墳全景	50
41. 24号墳全景	51
42. 25号墳全景	51
43. 19号墳出土須恵器大甕	51
44. 19号墳出土耳環、小玉、刀子	51
○18号墳墓前における鍛人式	3
○19号墳奥壁石の移築作業	4

例 言

1. この古墳群の発掘承認番号は、昭和46年6月19日、委保第5の614号である。
2. 鷹巣12、15、16、17、20、22号墳実測図は、宮城県教育委員会の提供によるものである。
3. 地形や墳丘実測図は、すべて真北で作図しているが、18、19、48号墳では磁北で表示した。磁北の場合、真北に対し7度西に傾く。
4. 古墳石室などの実測には、志間、小井川、中橋、高倉（敏）、高橋が当り、遺物の実測では志間、小井川、橋本が作成、製図にあたり、写真は志間が担当し撮影した。



第1図 懸果古墳および周辺の古墳位置図（国土地理院承認番号・昭47・第6152号） 1. 鷺巢古墳群 2. 明神裏古墳

1 3. 塔ノ入古墳 4. 亀田古墳群 5. 郡山横穴群 6. 寺入横穴群 7. 金倉横穴群 8. 黒岩横穴群

白石市鷹巣古墳群発掘調査概報

1 遺跡所在地

白石市鷹巣字蛭賀屋敷後21, 13の1・字虎子沢山9の1

2 調査年月日

昭和46年6月23日～8月1日

3 調査主体者

白石市教育委員会

4 調査担当者

宮城県教育庁社会教育課 技術主査 志間泰治

調査者

宮城県教育庁社会教育課嘱託 小井川和夫

白石市文化財保護委員 中橋彰吾

調査参加者

宮城県教育庁社会教育課 氏家和典・藤沼邦彦・佐々木安彦・加藤道男・小笠原任・橋本幸子

宮城県白石高等学校教諭 尾坂知己・高倉淳

宮城教育大学学生 高橋守克・太田昭夫・土岐山 武

東北学院大学学生 高倉敏明・佐藤規夫・木村浩二・河東田俊一・佐山京子・佐々木千枝子

東北地形社 藤波清治・天間房美

宮城県白石高等学校郷土研究部生徒 小川淳一・鈴木 稔・新井文英・大槻 剛・小野寺孝三・菊地富士男・国分正晴・小林悦夫・佐藤郭夫・高橋正秀・八島宏信・八卷武男・阿子島 香・大津隆雄・小室勝則・佐久間光雄・佐藤清宏・佐藤秀光・高橋幸雄

地元協力者 村上盛雄・遠藤宗一・遠藤忠信・高子藤吾・高子 誠・高子清之進・高子常蔵・高子倍夫・菊地勇治・菊地次郎・跡部清司・長門光一郎

協力機関 宮城県白石職業訓練校

調査事務局 白石市教育委員会社会教育課長 佐久間克

同 社会教育主事 太斎 享

発掘に至るまでの経過

鷹巣古墳群は、寿山団地の開発計画によって、すでに10基以上の古墳が姿を消したが、昭和40年秋には宮城県白石職業訓練校が建設されることになり、13号墳が事前調査され埋滅した。その際、すぐ東に隣接する主墳の瓶ヶ盛古墳は計画からはずされたため、これ以上の開発の波をかぶることは、もはや、ないものと思われたが、昭和43年になると、前に造成した訓練校敷地の東隣の切土は勾配が急なため、年々土砂が崩落しており、危険防止のため、勾配を緩和する措置を講じたいが、瓶ヶ盛古墳に影響することも懸念されるので、一度現地をみて指導してほしい旨の連絡があった。そこで、早速、現地を踏査したところ、計画からみて、瓶ヶ盛古墳の周辺部を削平するようになるため、現状で防護処置を講すべきであると指摘した。

こうしたことなどから推して、瓶ヶ盛古墳を含む古墳群が、いつ蚕食されるかしれないと予測したため、白石市教育委員会事務局に対して、早くこれらを史跡に指定し、保護の手を加えるべきことを要望し、その後も折にふれて強調してきた。

ところが、昭和44年7月、白石市教育委員会から突然、電話で瓶ヶ盛古墳を含む鷹巣丘陵一帯を削平して、ここに500戸の住宅団地を造成することを企画し、すでに宮城県住宅供給公社にその設計を依頼したという情報がもたらされた。

そこで、公社に今野久作総務部長をたずね、これら古墳の保存のために計画・設計を変更をする余地がないものかどうかもう一度、検討して貰いたい旨、札したところ、古墳は丘陵分水線上に散発的に点在するため、これらを残すとなると開発計画は事実上中止せざるを得ない状態となるし、市の要請によって行なう事業であるので留意はするが、むしろ市当局と直接協議するのが第1であるとの話をうけた。

そこで、市教育委員会、市建設課に出向き鼎談したが、保存と開発側の意見が容易に一致せず、それに加えて、地主の利害関係も複雑にからみあって、再三にわたる折衝でも、なかなか解決の方策は見出せなかった。

一方、文化庁記念物課から宮城県多賀城跡研究所長として着任したばかりの岡田茂弘氏にも現地に同行願い、とるべき方策などについてもご教示を願った。また文化庁記念物課文化財調査官横山浩一氏にも事情を報告し、指示を仰ぐなどし、一応、保存についての基本的態度を打ちだし、それらの結論にもとづいて、県教育庁今野勲社会教育課長と麻生白石市長の会談がもたれた。その結果、瓶ヶ盛古墳を含む周辺の小古墳群を買上げ、県指定史跡として保存する。飛び飛びに点在する18・19・48号墳については発掘調査のち住宅団地として造

成することもやむをえない」とし、ようやくこの問題に終止符が打たれた。

もちろん、これらを史跡に指定する場合は、瓶ヶ盛古墳やその周辺の古墳だけでなく、そのほかにも残存する古墳すべてを含めて指定を取りはからうよう提唱してきたが、それが実現しないうちに新たな事態が発生してきた。それは一部地主がどうしても圃地造成に応じないため、予定通り残土処理ができないことが明らかになった。そこで、これら地域をさらに東に拡張する予定で用地取得にのり出し、昭和46年4月にはこれらの地域の古墳を含めて発掘届を提出してきた。

そこで、市当局に話合いの趣旨に反することでもあり真偽のほどを聞き合したところ、それは事実で、小型前方後円墳を含む20・21・22号墳も造成対象になっているという返答がもたらされた。そこで、これら3基の1群を計画からはずすよう再び要請し折衝が重ねられた。一方では文化庁記念物課野口義磨調査官に、これまでの経過を伝え、指示を仰ぎ対策を協議するなどした。

こうした事態を憂慮する白石市教育委員会小沢五郎教育長はじめ、関係職員は、開発側との調整に奔走された結果、ようやくその努力が実を結んで、3基を保存することに同意を得た。

このような経過を経て、昭和46年6月には、宮城県教育委員会と白石市教育委員会が連繋して、東北地形社に委託しこの地域一帯の古墳群の測量調査にのり出し、20cmセンターの地形図を作成した。



18号墳墓前における鍛入式



19号墳奥壁石の移築作業

った。

この期間中、東北大学名誉教授伊東信雄博士の来跡と指導があったり、県教育庁今野社会教育課長、村上文化財係長の現地観察などもあった。

その後、比較的保存のよい18号墳箱式石棺と 19号墳横穴式石室を瓶ヶ盛古墳周辺の空地に移築する作業を行ない、これらの永久保存をはかることとした。

なお、開発計画からはずされた瓶ヶ盛古墳（12号墳）と15・16・17号の第2群。20・21・22号の第3群および24・25号の9基については、昭和46年11月9日付けをもって宮城県指定史跡として、永く保存されることに決定した。

これらの地形図の完成をまって、6月23日には先の協定に基づいて18・19・48号墳の調査の鍵入式を行ない、早速48号墳を手始めに19号墳、18号墳の順で発掘作業が進められることになった。この調査には延269人の人員を動員、ベルトコンベアー2台を駆使し、延39日を要した。

発掘作業は、天候にも恵まれて順調に進捗した。造構の大略が判明した段階で7月27日、関係機関および一般市民を対称として宮城県白石職業訓練校を会場として発掘報告会を実施した。参会者は60~70名に達する盛況で、暴露されてある古墳の壯大さや、出土遺物の数々に驚異の目を輝かせ、鷹巣古墳群のもつ重要性について、かなりの理解と関心を示し、文化財の保護・保存について再認識してもらうのに大いに役立

古 墳 研 究 史

江戸時代安永年間の風土記御用書山、刈田郡鷹巣村の名所の項に

1. 甕塚、右は往古瓶を埋候塚の由、申伝候處年月相知不申候、小十郎様御先祖小十郎様景良公奥様鑑照院様当村寿山御住居の折、宝永5年9月7日獅山様（伊達吉村）被為人候節右塚御覽被遊候事とあり。

同 刈田郡白石本郷の旧跡の項には

1. てうしか森、高さ1丈余と簡単にふれ、著学者佐久間義和も「奥羽觀跡聞老志」の中で、調子ノ岳を解説しているが、前者が、現在の甕ヶ盛古墳であり、後者は銚子ヶ盛古墳であることはいうまでもない。しかし、これらの記録をみても、古墳としての記載や取扱いはなされていない。

もちろん、これらの古墳には、古くから甕ヶ盛古墳を具足塚と呼ぶ人があったり、あるいは48塚と稱する人々がいて、部落戸敷がこれら古墳の数以上に増えると断絶する戸敷ができるとか、これらの塚を掘るものがあると、その者の家は滅亡するとかいう口碑、伝説があって、かなり以前から、地方人の間では、古墳の存在は周知の事実となっていたもようである。

明治初年には、甕ヶ盛古墳を発掘しよう計画した人達もあったといわれるが、故あって途中で中止したともいわれている。そして、これらの古墳が本格的に発掘され出したのは昭和初年に入ってからで、比較的簡単に発掘できる小規模古墳が俎上にのぼったようである。そして、これらの古墳の発掘により、多數の遺物が発見されたため、当時の新聞にも大きく宣伝されて注目を集めたものようである。

また、山麓の部落の人々は、建築用石材などの不足から、入手に容易なこれら石室の石材を採取するなどして、石室を破壊したのもこの頃のこととされている。

こうした事態を憂うる人々によって遺跡保存の急務が叫ばれ出したりしたため、白石町および白石保勝会では、第3寿山風致地区として指定し保護をはかることになった。

こうした中で、荒廃した古墳群を丹念に調査し、古墳群の全容を初めて学界に紹介したのは竹倉信光氏である。その報文「宮城県刈田郡白石町鷹巣古墳群調査報告書」昭和16年刊は、以後のこれら古墳研究の基本的な文献として現在も注目をあつめている。

その後、昭和40年になって寿山団地造成工事によって1号墳が、ついで同年10月には、宮城県白石職業訓練校の敷地造成工事によって13号墳が、それぞれ破壊されることになったため、宮城県教育委員会および白石市教育委員会が主体となり、東北大学文学部伊東信雄教授を担当者とする調査団により第1次・第2次調査が行なわれた。

ついで、昭和41年7月には、前同様の編成で第3次緊急調査が行なわれ、3号・4号・7号墳が姿を消した。したがって、今回の調査は第4次緊急調査に当ることになる。

関 係 文 献

1. 片倉信光著「宮城県刈田郡白石町鷹巣古墳群調査報告書」昭和16年8月
2. 宮城県教育委員会編「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—鷹巣古墳群調査概報」宮城県文化財調査報告書第12集 昭和42年
3. 宮城県白石高等学校郷土研究部編「斎川流域および北無双作遺跡の出土遺物について」昭和45年
4. 宮城県教育委員会編「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第27集 昭和47年

古墳群の位置と分布

鷹巣古墳群は白石市鷹巣字師賀原敷後、字虎子沢山、字本木山、字堂ノ入山などを中心に所在する。

この丘陵は、白石市街地の東方に位置し、その舌端は東北本線白石駅のすぐ東にまで迫っている。こうした東方から盆地に突き出た丘陵としては最大のもので、東の山地基部からの距離は約2km、巾は多小の屈曲はあるが約500mで、丘陵の最も高い部分で標高は約100mとされており、白石市街地のある平地からの比高は50mとなる。丘陵頂部の起伏は少ないが、両斜面の傾斜は割合急で、やせ尾根となっている。

つぎに、この丘陵から周辺の地形の景観を展望すると、南側は鷹巣部落のある沢合の耕地を距てて、経塚山古墳のみられる達平^{たっぴ}の丘陵があり、これと併行して東から西に走る。南西部は開けて、大平、盃川の白石盆地がみられ、遠く福島県境の山陵がこれらを囲繞する。西は白石市街地を距てて奥羽山脉の山並みが屏風状に指呼の間にある。北西部には、奥羽山脈の峻峯、藏王連山が馬背状に屹立し、その手前に似刈田ともよばれる青麻山塊がせまる。北は、飯塚の谷底低地をはさんで大蔵山の山塊となる。東方は、低平な山地が折重なって続き、視界をさまたげている。こうした白石盆地の中央部をぬって盃川が、周囲の山地から流れ出る支流を集めて南から北に流れ、肥沃な土地をうるおしている。この盃川流域を中心とした耕地一帯には土師器などの出土が多く、古墳時代の大集落を偲ばせるものがある。

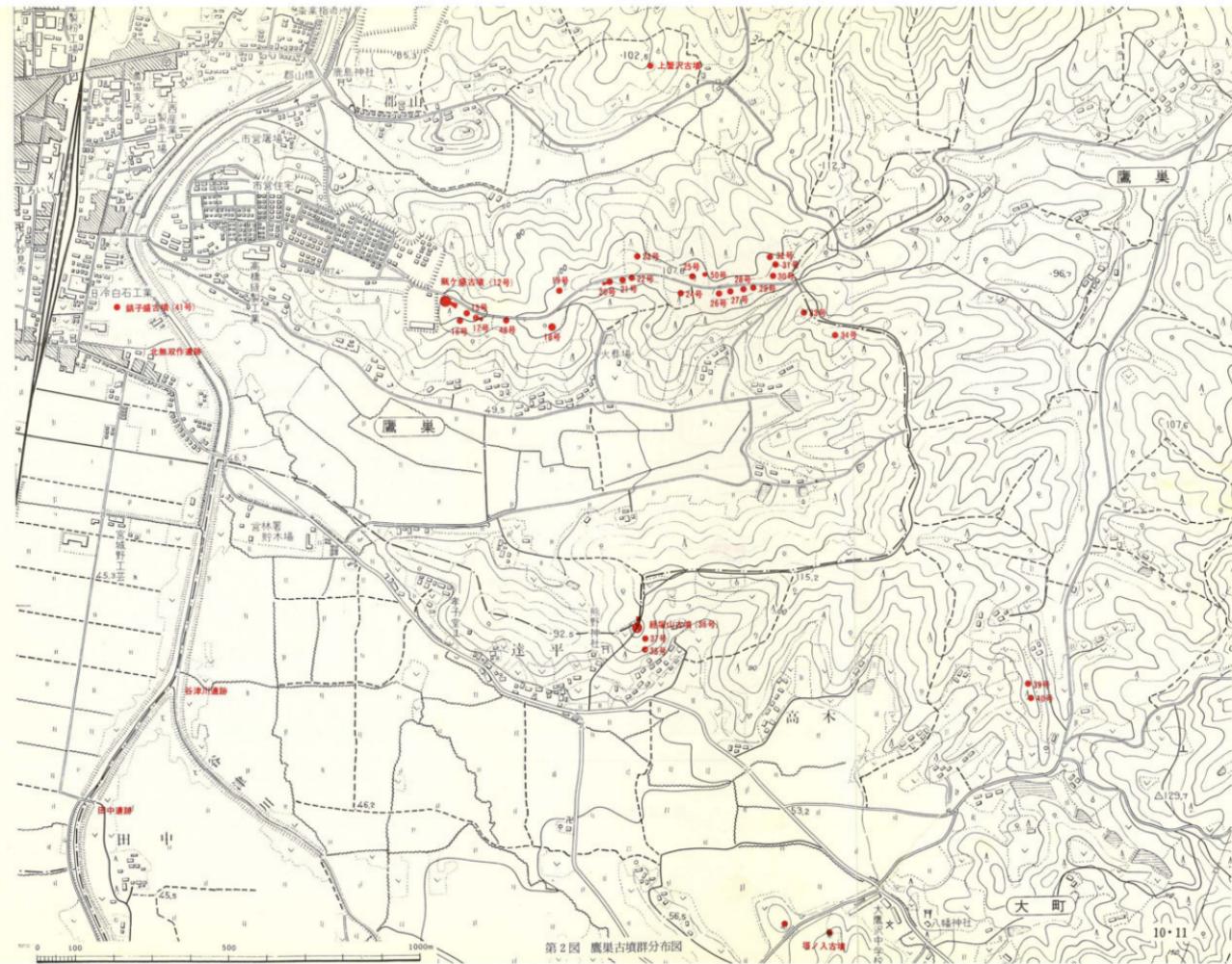
ところで、こうした眺望絶佳の丘陵上にみられる鷹巣古墳群は、どんな分布を示すかについて概観すると、その殆んどが尾根上に一線をなして点在している。丘陵舌端近くに片倉氏の呼稱する第1群10基が所在したが、寿山団地の造成により壊滅してしまった。これらと若干距たる東隣の小高い地形上に第2群がみられる。瓶ヶ盛古墳がこれに属する。この瓶ヶ盛古墳は、これら古墳群中、最大の規模を誇り主墳と目されている長軸56mの前方後円墳で、その前方には15・16号の円墳と、長軸15mの小型前方後円墳（17号墳）とからなりたっている。なお、瓶ヶ盛古墳の南東部の13号墳は、宮城県白石職業訓練校の建設に当り事前調査ののち破壊されてしまった。

これら第2群の東方100mの地点に48号墳が位置し、さらに100mほど東に18号・19号墳が散在する。

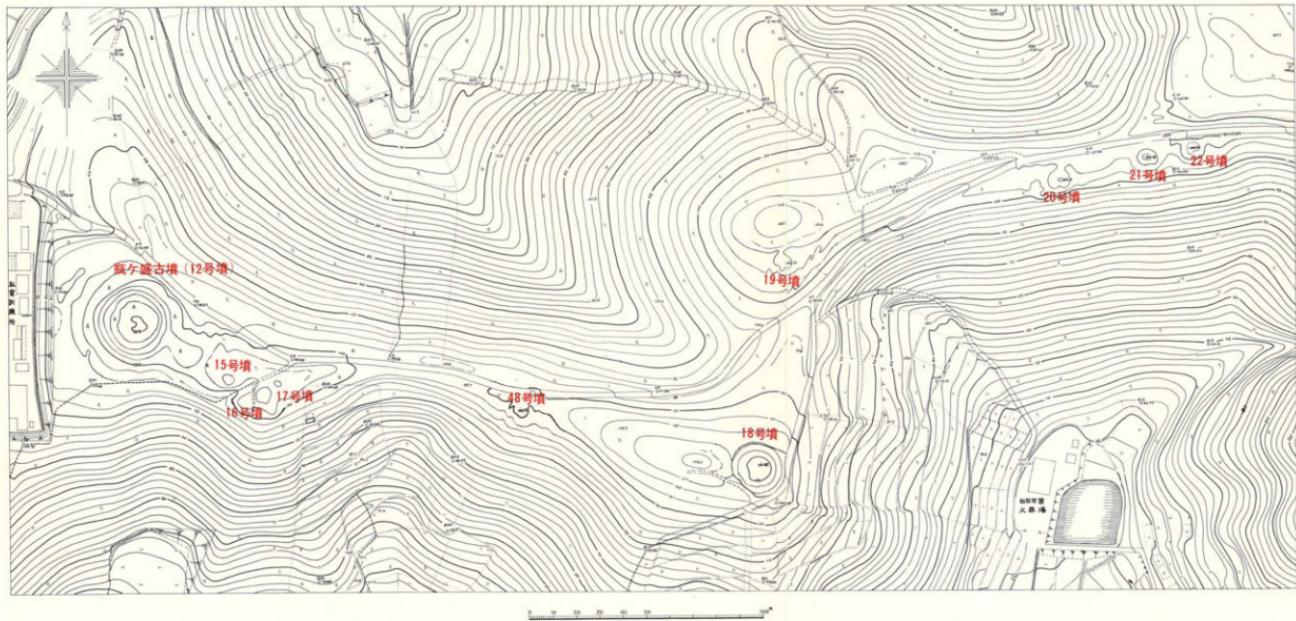
この19号墳より約120mほど東に、小型前方後円墳の20号墳と21・22号円墳が一線にならび第3群となり、さらに東200mの採伐地帯に24号・25号・50号の3基がみられ、それに隣接して26号・27号・28号・29号の4基が第4群を形成する。若干距てて第5群の30号・31号・32

号円墳とつづく。そしてこれらの丘陵南東部の頂部に33号・34号墳が点在する。

また、鷹巣部落の存在する南の耕地を距てた達平丘陵に前方後円墳ともみられる経塚山古墳がみられ、はるか東には、39号・40号墳が認められる。北側の国道113号線（福島県相馬市～山形県南陽市を結ぶ）の走る飯塚丘陵上にも、上蟹沢古墳が発見されており、鷹巣丘陵舌端南西の平地に残る鎌子ヶ盛古墳などと考えあわせると古墳の分布範囲は意外に広ろがっているということができる。



第2図 鷹巣古墳群分布図



第3図 鷹巣古墳群地形図

古 墳 各 説

18号墳

位置と封土 この古墳の墳頂には、江戸時代から山の神の祠が祀ってあり、これら周辺には老杉が鬱蒼と生い茂っていたため、墳丘はよく保存され、盗掘されたことのない古墳として注目されておった。また、山の神古墳の別稱が与えられていたのもこれに由来する。

この古墳は、鷹巣丘陵の最高所に位しており、墳丘からは、この丘陵に点在する殆んどの古墳を見渡せる場所にある。東と南は特に展望がよく、眼下に鷹巣部落を見下すことができる高櫻の地点に位置を占めている。

この古墳は、直徑22m、高さは西部で2.5mあり、古墳の規模は瓶ヶ盛古墳につぐ大きさである。この頂部は、僅かに平坦になっており、形状は円錐形を呈し、形のよく整った円墳で南西部が僅かにゆがんでいる。そして、西部と北部の墳體は、過去に開墾などにより削平されたような形跡が認められる。東部と南部では、僅かな平坦部を形成したのち、自然の地山の傾斜面に続く。そして、この部分からの高さは約3.20mと計測される。

これら墳丘表面には、円筒埴輪片や、葺石かと思われる石塊が各所に露出してみられた。発掘の結果、葺石状の石塊は、大小不揃のうえ、他から拋りこまれたような状態で出土した。しかも、これら石塊の出土量も少ないし、出土地点にも斑があり、まばらなため、どうしても葺石とは認めがたかった。したがって、この古墳の周辺を開墾した際に、露頭した石塊などをつぎつぎに投げこんだものと思われた。

埴輪片は、殆んどが円筒埴輪片で、墳丘の全面で、しかも表土より出土した。そして破片も20×20cmほどの大きさが限度で、しかも円筒埴輪基底部が挿え置かれたような状態の出土例は、1か所も認められなかった。勿論、復元可能なものの出土もみられなかった。これらは墳丘築造後に表面にばらまかれたものかと思われた。

最後に、これら古墳を斬ち削って、墳丘断面を観察することになったが、その結果、自然の地山を整形したのち、それに埴土、埴壤土などを交互につきかためて積上し築きあげたもので、積上層の高さは2.1mと計測された。特に、中央部では棺を安置するためか円錐状に築土が行なわれたようであるが、周辺部を築造する際は水平に積上げてあることが特徴づけられた。

また、これらの墳丘を築造するにあたって周辺の土を盛り上げて造ったとすれば、当然墳丘裾部にはこれをとりまく周溝がなければならないので確認調査を行なったが、浅い落ち込みはみられたが、周溝と断言できるような顕著な地溝は確認するまでに至らなかった。した

がって、この古墳の墳丘を築くための土は、この古墳周辺部の、しかも広範囲から少しづつ掘りとて運びこまれたとする公算が強い。

なお、これら封土の調査中に、1個の石器を発見し、東北大学文学部考古学教室芦沢長介教授の鑑定を煩わしたところ、旧石器時代の搔器の可能性があるとのご教示をえた。したがって旧石器を包含する遺跡は、ここからそう遠くない地点に存在するのではないかと予想される。

内部構造—箱式石棺—

墳丘中央部の地下約20cmの位置に、一抱大の大きさの蓋石と思われる扁平な安山岩の板状の石が不規則な状態でみつかったが、これは、過去に盗掘の厄にあったものか、あるいは山頂に山神などの祠を祀るときに覆上が浅いため、蓋石に達し掘り返されたものと思われた。これらを取り除いたところ、その下から箱式石棺が現われた。

これらの石棺の方向は、東西位をとるが、東部を7度ほど南にふっている。石棺の長さは1.72mあり、山は頭部と思われる東側で45cm、西側で若干せばまり35cmとなり、両側壁石はそれぞれ安山岩の板石4板を用い、重ねつぎをして立て並べられている。これらは、七庄をうけて若干内傾していた。東西両端の妻にあたる部分の石は、割合大きな一枚石を用いてある。底面には、やはり同質の板石片を敷きつめ一部空隙には粘土の充填されている部分もみられた。そして、これらの底石の両端がせり上り若干高まった状態でみられた。したがって石室の高さは30cm前後と計測された。また、これら底石の下には、それらの沈下を防ぐため、僅かではあるが、精選された河原の小砂利を布置するなど、かなり入念な造り方を示していた。

石棺の側壁石の周辺には、石棺の莊重さを誇示しながら、石棺側壁石を補強する意味あいをかねて、板石が敷き並べてあった。

これら石室の構築にあたっては、墳丘を築く過程で築造されたものか、墳丘が完成したのちに掘り込んで造ったものか、検討を加えながら慎重に掘り進んだが、黄褐色積土層の変化が顕著でないため、断定しがたかったのは何としても残念である。

副葬遺物については、石棺内部からは殆んど出土せず、棺外の中段北側から無茎鉄錐4点が出土したほか、石棺の北西部から石製模造品の曲玉1点、有孔円板4点、「」印422点が散乱した状態で出土した。ただ臼玉数点は石棺内の土妙の中から発見されたが、これらは後世の流入と認められた。

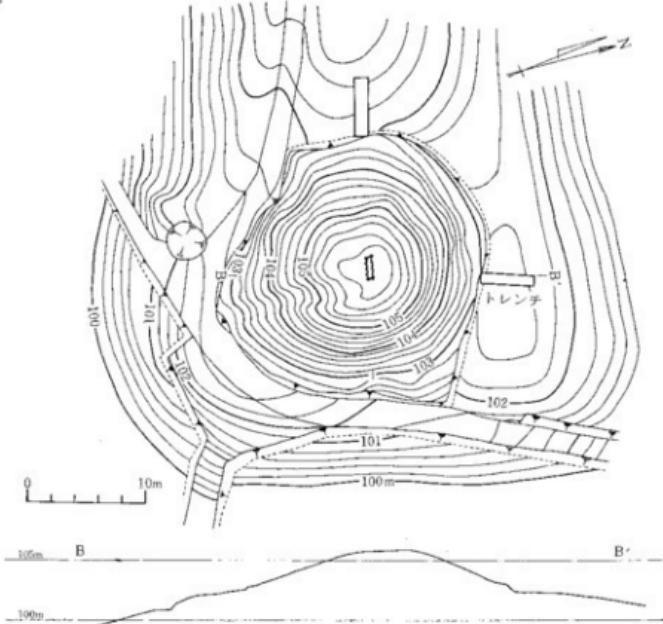
なお、13号墳の发掘例にもあるように、この石棺以外にも遺構が発見される可能性を考えられたため、墳丘全体を地山に達するまで掘り下げてみたが、この石棺以外には何らの遺構も発見できなかった。したがって、この古墳では1棺だけの埋葬と考えられた。

出土遺物

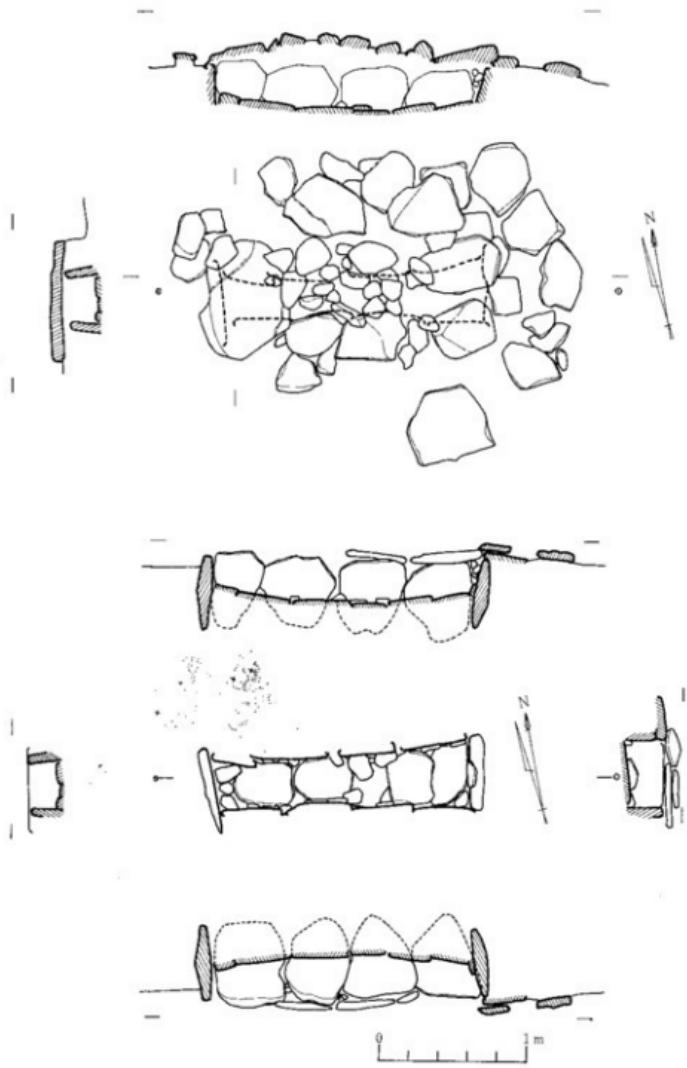
鉄鎌 いづれも長さ3cmほどの二等辺三角形状を呈する同型同大の平様式鉄鎌で、底面の両側は、弱い逆刺となる。中央部には、径7mm、中空のふくらみがとおるが、これは矢柄を挿入するためのもので、現にこの部分の破碎したものをみると、腐朽した木質部がまだ残存するものも見受けられ着装状態がわかる。

石製模造品 これらは滑石、または蠟石を用いて作ったもので、紐通し穴は糸ずれのあるものは認められなかった。曲玉は長さ2.6cm、厚さ4mmで、一部には作製の際のすり痕を残すような粗雑な作りである。有孔円板も4枚出土したが同様のもので、これらはすべて二孔を有するものであった。白玉は、穿孔した管状のものを断ち截ってつくられたものらしく直径5mm、厚さは一定していないが3mmほどで孔のあけ方も中心にあけられているものと、中央部をはぶれるものなどとさまざまである。

円筒埴輪片 すべて破片であるが、径25~30cmほどの円筒状を呈するものとみられ、口縁部が厚く僅かに外反するものと、朝顔状に大きく外反するものと二種類あることが観察される。



第4図 18号墳地形および断面図

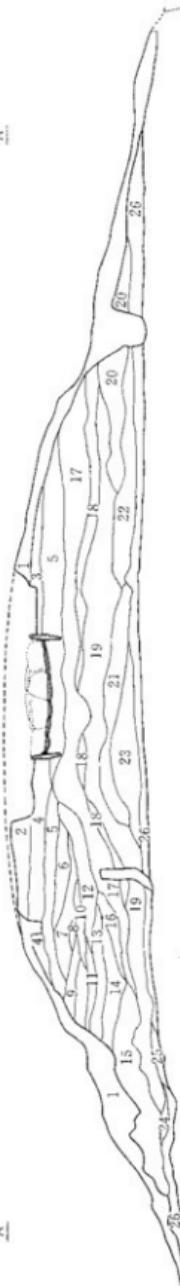


第5図 18号填箱式石棺蓋石出土状況実測図(上)

18号箱式石棺と遺物出土地点(下) ◎白玉出土位置地点

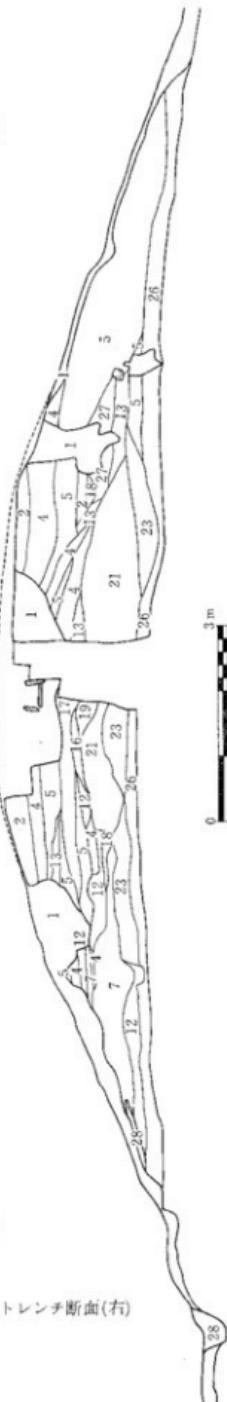
×石造模造曲玉および円板出土地点

A'



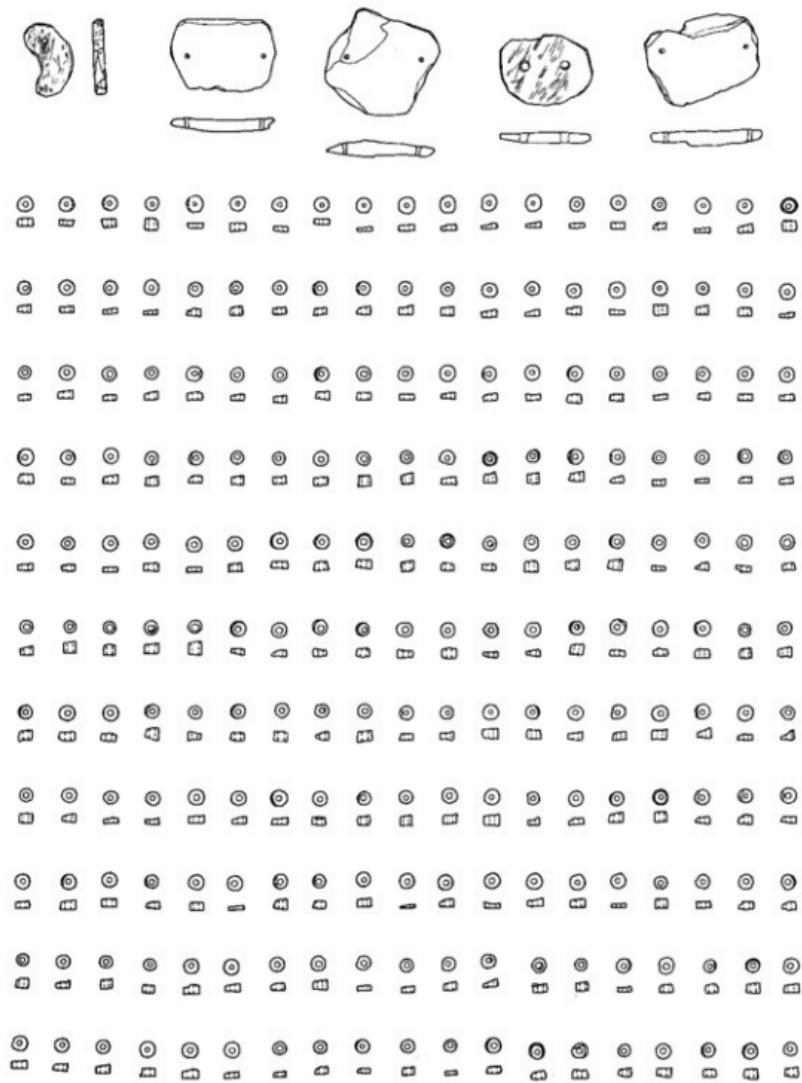
- 1 茶上
2 紫褐色土層
3 黃褐色土層
4 杏褐色土層
5 雜褐色土層
6 小綠色土層
7 緋褐色土層
8 斑褐色土層
9 紫褐色土層
10 希褐色土層
11 單褐色土層
12 雜赤褐色土層
13 紫褐色土層
14 紫褐色土層
15 褐色土層
16 灰色土層
17 紅褐色土層
18 褐灰色土層
19 斑黃褐色土層
20 細褐色土層
21 黑褐色土層
22 斑紫褐色土層
23 紫褐色土層
24 細褐色土層
25 褐褐色土層
26 灰灰褐色土層
27 花葉褐色土層
28 从色土層

B'

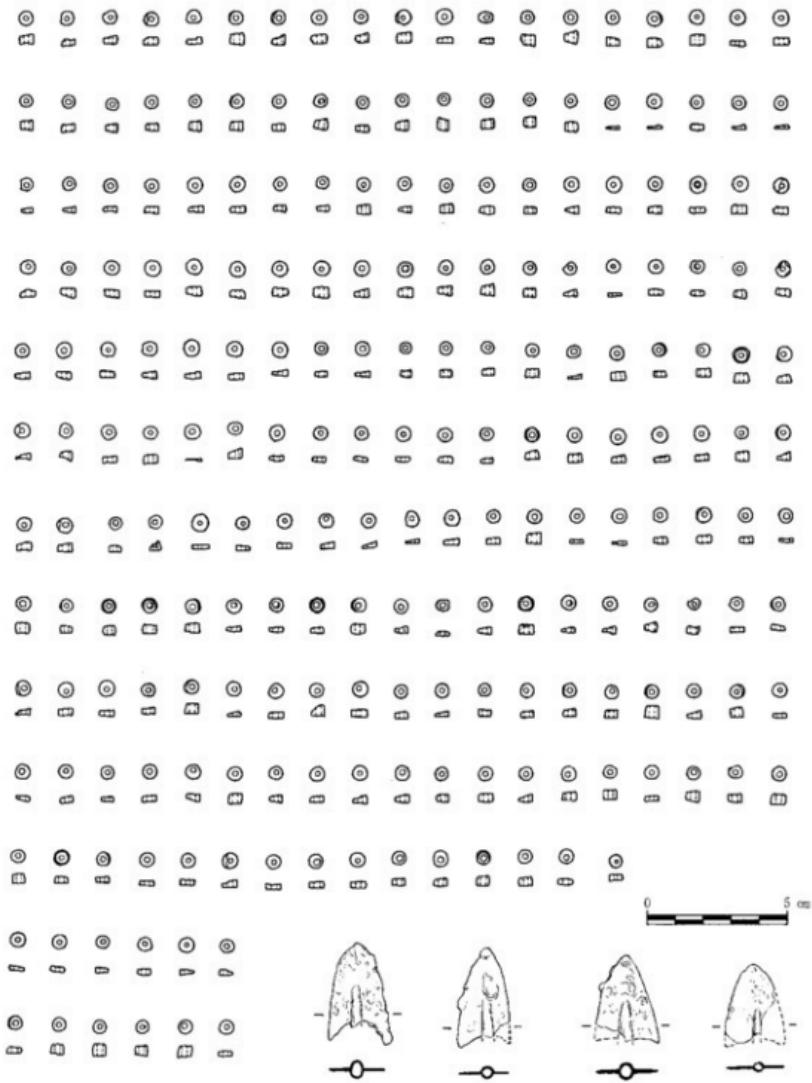


0 3 m

第6図 18号墳墳丘断面図
東西トレンチ断面(左)、南北トレンチ断面(右)



第7図 18号墳出土石製模造品（曲玉、有孔円板、白玉）



第8図 18号墳出土石製模造品(白玉)および鉄器

19号墳

位置と封土 18号墳の北約90mの地点にある古墳で、丘陵鞍部を距てて18号墳と対峙している。19号墳は北側高地の南緩傾斜面の中腹につくられた円墳で、直径11mあり、これら古墳の墳丘裾部北半に巾約2mの周溝が半月状に繞っており南側では、自然の傾斜面となる。高さは北側で計測して約60cm、南側では1.60mと計測された。

発掘前は、この地一帯は雜木林で覆われていたため、古墳の形状の保存は割合によかったが、発掘を実施するため、この付近一帯を刈払ったところ、この古墳を貫いて走る山火事防止のための一条の築堤らしきものが認められた。これらは、後世に造られたもので、古墳築造には関係のないものであることが一見して知られた。また、墳頂付近には、石室奥壁石の一部が50cmほど頭を出しており、その周辺には盗掘穴もみられた。発掘は墳丘の調査と内部構造の確認の二つを柱として調査を行なった。

この古墳の墳丘を含む周囲に4本のトレンチを設定し調査した結果、巾約2m、深さ40cmほどの周溝が確認されたが、おそらくは、これらの上を利用して石室が覆われたものと推察された。封土は、石室天井をかろうじて覆いかくす程度に盛り上げられたものと思われた。

内部構造—横穴式石室—

内部主体は、一応、奥壁石の存在から横穴式石室と予想されたため、これを中心に側壁積石を追い南に掘り進めた。石室内には一抱大の積石が転落した状態でみつかり、発掘作業はこれらを剥離しながら慎重に取りはずしていく。勿論、表土すぐ下には、蓋石らしい板状の石が若干みられたが、石室を覆うほどの大きさのものはなかったので蓋石と断定できるかどうかは疑問というよりはかない。あるいは以前に地元の人々の手によって持去られ、比較的小なものだけがとり残されたのかも知れない。

ところで、石室の形がようやく現われたころ、玄門部付近の堆積土層中から須恵器大甕の破片が上下に散乱した状態で出土した。勿論こうした石室内部に流入した土砂の堆積をすべて払い上げてはじめて石室の全貌が確認された。

石室は、安山岩の自然石とそれに若干手を加えたような一抱大の石塊を積上げて作った横穴式石室で、方位は南北軸に対してN 20° Wで、石室平面は胴張りが強く、巾は奥壁部で70cm、胴中央部で1.20m、玄門部で85cmと計測された。底面は5°ほど南に傾き、底面全面には直径10~15cmほどの玉石を10cmほどの厚さに敷きつめてあった。

奥壁石は高さ1.50m、巾70cm、厚さ40cmの巨大石を用いてあり、これを両側の大きな側壁石ではさみ込んで直立させてあった。

西側の側壁石の積石面は垂直に1.20mほどの高さに積上げられていたが、東の側壁積石は土圧をうけてその大部分が石室内部に転落、あるいはせり出しあいておった。勿論これら積

石の裏側には、ほとんど嵌め石とか粘土を充填した構築法などっておらず、したがって脆弱さが露呈したものと判断した。

石室と羨道を区別する玄門柱石は認められなかつたし、建てられた痕跡もない。ただ僅かに東西に横たわる巾10cm、長さ65cmの粗石によって石室の内外を区画したものようである。

この粗石より前方にも石室積石の延長が1mほどにわたつてみられたが、これらは前部に近づくにしたがつて積石の高さを減じている。したがつて羨道部としての体裁をなきない形状であった。したがつてここを出入口として棺または遺体を搬送するにはあまりにも狭少で、その機能を充分に果したものとは、とうてい考えられない。これらの部分の床面には灰石敷はなく、あっても、ほんの部分的にみられたにすぎない。

出土遺物としては、須恵器人面片のはかに、石室中央部の奥壁石寄りの玉石の上に鉄刀子1本と、錫を主成分とする耳環2個がみつかり、さらに玉石の下からガラス製小玉47個が散乱してみつかった。また粗石の直上、東壁に接した地点で金環1個が出土した。このように石室の壮大さに比較して、遺物の出土例が少ないので、盜掘をうけ荒された古墳であることを裏書きしているのかもしれない。

なお、石室を築くにあたつては、石室北半、即ち奥壁近くでは、地山をかなり掘り下げ、低平にし安定した状態に整地したえうで築造が行なわれたことが、地層から判断された。

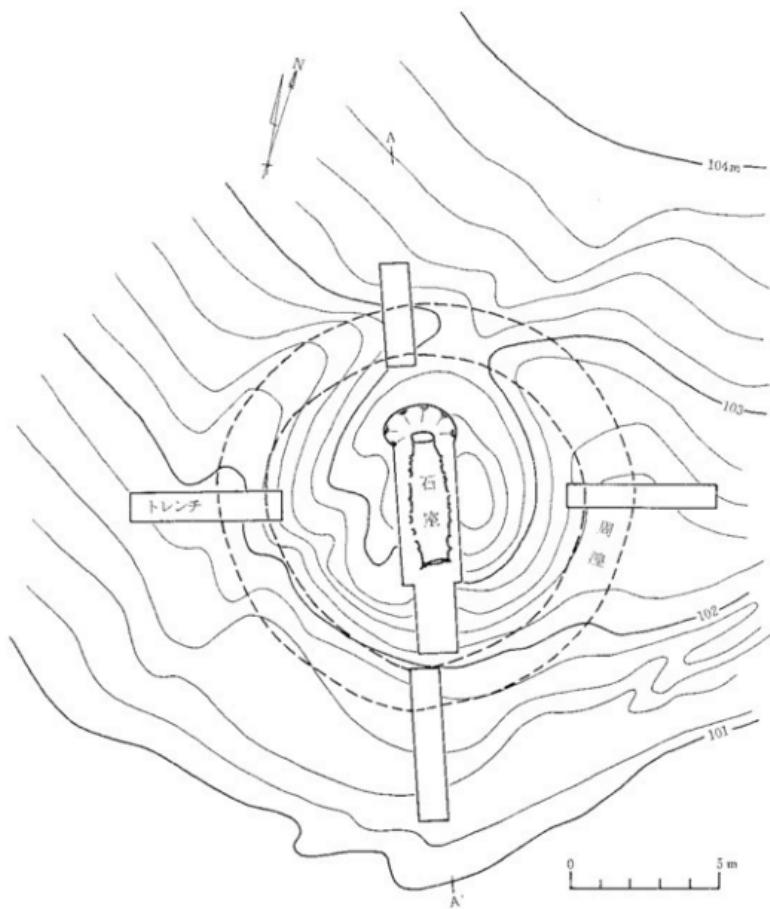
出土遺物

須恵器大甕 器高34.3cm、胴体部径は33.1cmで比較的肩部の張つたもので、底は丸底の大甕で、口径19.4cmの外反した口縁部がつく。口縁端は三角形状に折り上げてある。口頸部には波状文がめぐる。胴部表面には条線状の、そして裏面には青海波文の敲目文が認められる。色調は全体として暗青色を呈する。

鉄刀子 全長8.5cm、平背直身で、刃長5.5cm、刃巾1cmの小刀子である。

耳環 三点出土しているが、粗石上部出土のものは、最大径2.35cmで、鍍金されているが、他の二点は直径4cm、割合い大型で錫を主成分とするもので腐植が甚だしく保存状態は悪い。これらは奥壁に近い中央部玉石の中から破碎して発見された。

ガラス製小玉 47個紫紺色を呈する直径4mm前後のものが大部分で、そのうち暗青色と淡青色を呈するものが各1個づつみられる。これらは奥壁石近くの玉石下より出土している。

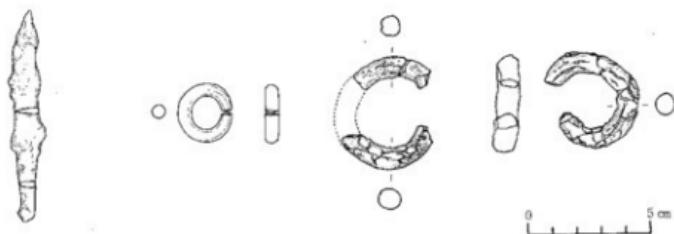
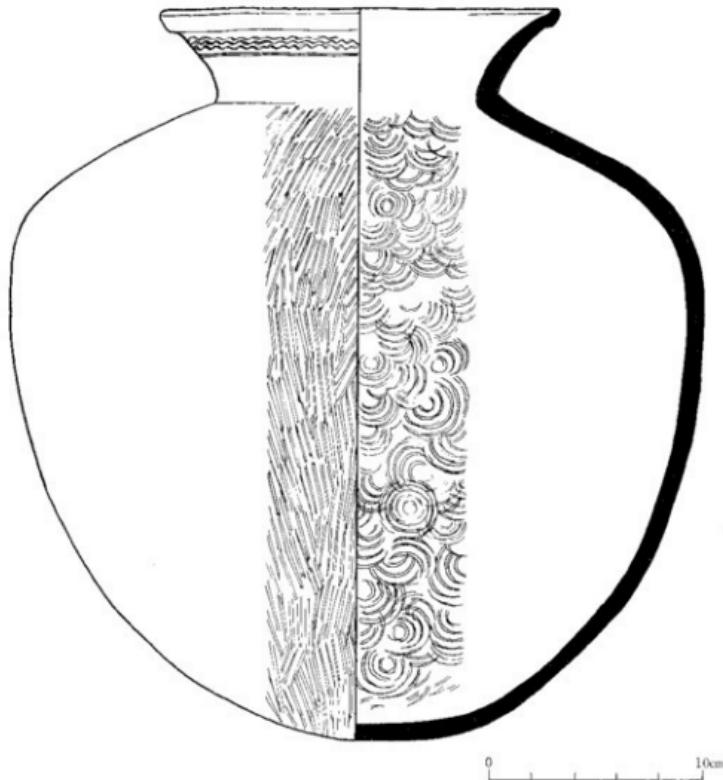


第9図 19号墳地形および断面図



第10圖 19号墳横穴式石室実測図

—刀子出土地点 ×金環出土地点
○小飞出土地点



第11図 19号墳出土遺物（金環、刀子、須恵器大甕）

48号墳

位置と封土

瓶ヶ盛古墳の東方、18号墳との間の丘陵部は、分水界が馬の背状にせばまたた地形をなしているが、その尾根の南側斜面にへばりつくように築造されているのが、この古墳である。

古墳は直径10mほどの小円墳で、この墳丘の築造にあたり、周辺の土をかき集めたためか溝が北半分を半月形にめぐり、南半は丘陵傾斜面に自然移行する。墳丘中央部には直径4mほどの大きな窪みがみられたが、これは土地所有者が過去に埴輪用基礎石をとる目的で石室石を探取し破壊したためできたものと証言している。

墳丘の調査は、主として周溝を確認するため、3本のトレンチを東、西、北の三方に設定したが、その結果、墳丘基部が確かめられたらし、溝の巾は1.5m、深さは40cmあることが判明した。墳丘の高さは北側で計測すると30cm、南側からの高さは石室前庭部床面からはかって1.40mと計測された。

内部構造一横穴式石室一

発掘は、墳丘中央部に南北に貫いてトレンチを設定し、残存する石室積石壁を探査することとした。ところが、墳丘南側では表土を剥ぐとすぐに、一抱大の石塊が乱雑にたたき込まれたような状態で出土し、発掘は難航したが、これらの石塊を取り除くと、安山岩の自然石および割石などを整然と積み上げた石室東壁があらわれた。勿論これらの石塊は閉塞用にたたき込まれたものと判断した。西壁ではそれらの石が殆んど持去られたものらしく、基底部の石組みが若干残存するにすぎなかった。もちろん、石室の奥壁石やその周辺の東西両側壁石などは痕跡さえ認められなかった。したがって石室の規模は推定の域を出ないが、平面形は二等辺三角形の頂部を切断したような形を呈する横穴式石室と思われた。もちろん、これら石室の形からいって、19号墳同様、奥壁石に大石を使用したろうと思われるが、発掘の結果からは、そうしたものの痕跡すら確認できなかった。発掘の各種状況を総合してみると、現存する石室積石北端より約1mほど北の位置に奥壁石があった可能性が強い。いまここに、残存部石室の計測値を示すと、石室は若干胴張りとなっており最大巾は1m、石室前庭部巾60cmで、玄門石、樋石などは見当らず最初から計画されなかったようである。石室東壁の積石の残存部は、よく当時の削をとどめており、現高80cm、前庭部では積石の基部の石しか残存しない。

床面には直径10cm前後の河原石を敷きならべてあり、その上から若干の遺物を検出した。即ち、直刀は東壁にそって刃先を南にして出土したが、石塊などの重圧をうけてか、捲曲して出土した。また、この柄部より20cmほど北で青銅製遺物がみつかった。前庭部近くの西壁からは有茎鉄鍔1点が出土したし、この周辺からは捉瓶破片が一括で発見された。

出土遺物

鉄直刀 平背直身の全長66.5cmの鉄刀で、刀巾は3cm、柄部は5cmで一部折損しているとみられる。上圧のためか梳齒が認められる。梢円形無窓の鐸が着装されていた。鞘は腐朽しにられなかったが、鞘尻金具が残存していた。柄部の近くで発見された径8mmほどの管状の青銅製品は組通し穴の金具かとも思われる。

鉄鎌 鎌先は小さな三角形状を呈し、それに茎がつく。

提瓶 扁平・球形の胴体部に、短小、ラッパ状の口頸部をつけた須恵器で、胴体部全面には整然とした陶軋痕を認める。胴肩部に2個の耳がつく。提瓶としては古い型式に属するものとみられる。



第12図 48号墳地形および断面図



第13図 48号墳横穴式石室実測図と出上面刀

今回の発掘調査に先立って、永久に保存されることにきまった古墳とその周辺地域について地形測量を実施したが、ここにその成果をもあわせ概観する。

12号墳（瓶ヶ盛古墳）

鷹巣山墳の主墳とみられているこの古墳は、その存在は江戸時代から文献にも書出され著名となっており、瓶ヶ盛古墳の別称が与えられ親まれてきた前方後円墳である。

この古墳一帯は、松と雜木に覆われていて見通しが悪いうえ、前方部の形状が不明確なため、この丘陵東端を横切る小径の崖みをもって尖端とみなし長軸約70m、後円部径60mの規模と略測されていた。

今回の実測調査に際し、樹木の全面刈払いを行なったところ、これらの中間に巾3m、深さ20cmほどの浅い崖地が分水線を横断して走るのか確認され、ここを前方部端とみるのが妥当と考えられた。しかし、これとても、前方部端の形状は方形をなすこともなく、その上、周辺らしくはあっても極めて浅いなどのことから、不確定な要素も多分に内蔵しておるため、巾15m、長さ15mと概略を示すことにとどめる。そしてこれらは、今後この墳丘をめぐる埴輪の配置状況や周辺の確認調査によって始めて確定されるべきものと思われる。

一応、こうした観察結果を基礎として全長56mとしておく。後円部径は50m、二段築造からなり、高さは西の墳丘基部より測って7mで、後円部西半には、巾5mの周溝が認められる。後円部には各所に盗掘された痕跡がみられるが、いづれも主体部に達するに至らないため末漏とみてよく、したがって内部主体は不明である。

墳丘の周囲には直径25~30cmほどの大きさの埴輪円筒が繞らされており、特に南側のくびれ部からは雌鳥形埴輪と、水鳥と思われる形象埴輪が出土している。

こうした諸種の観点に立って総合的に判断をすると、この古墳は、本古墳群中で最も古く築造された古墳の一つとみることができる。

15号墳

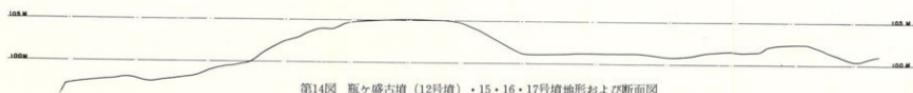
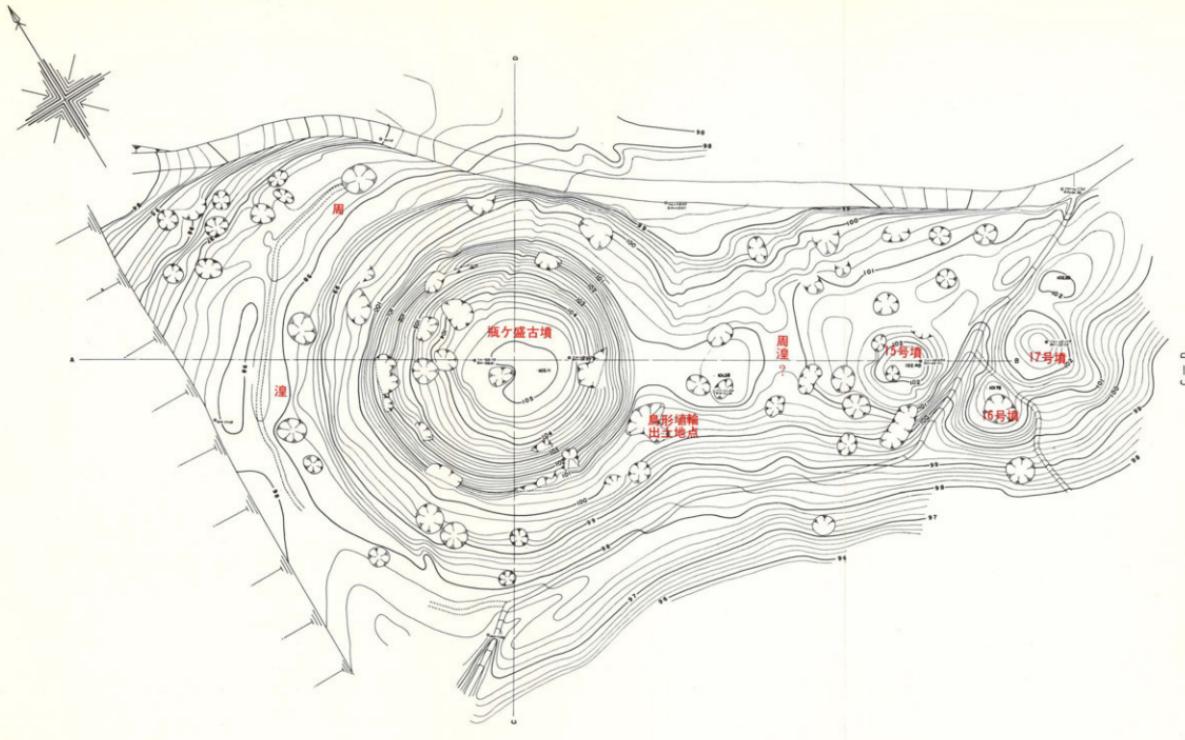
12号墳の前方部前面にみられる形のよく整った直徑11m、高さ1.20mの円墳で、未調査の古墳である。

16号墳

15号墳南東部の傾斜面にみられる直徑10m、高さ1.40mの円墳で、中央部には盗掘を物語る大穴があけられており、かなり破損のはげしい古墳といえる。

17号墳

15号墳の東の傾斜面につくられた、長軸15m、前方部巾5m、後円部直徑8m、同高さ1.10mの小型前方後円墳で、前方部をかなり低い位置におくため、盛り土と自然の地形との区別は明確でない。



第14図 瓶ヶ塚古墳（12号墳）・15・16・17号墳地形および断面図

20号墳

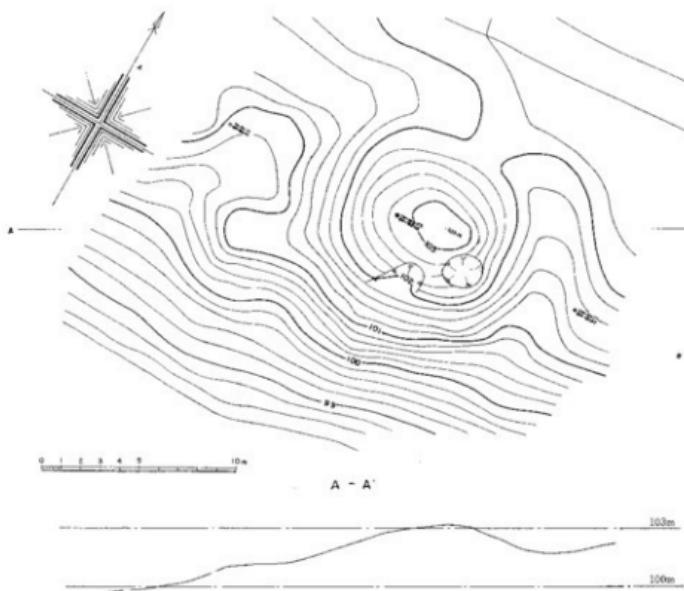
丘陵分水線南側の緩傾斜面につくられた小型前方後円墳で前方部は南西部を指向する。長軸18m、前方部幅4m、同高さ85cmと低平で、後円部直径12m、同高さ2mあり、現在、後円部南側に盗掘の跡をとどめるが、ここには割石が散乱してみられる事から、内部主体は横穴式石室と思われる。

21号墳

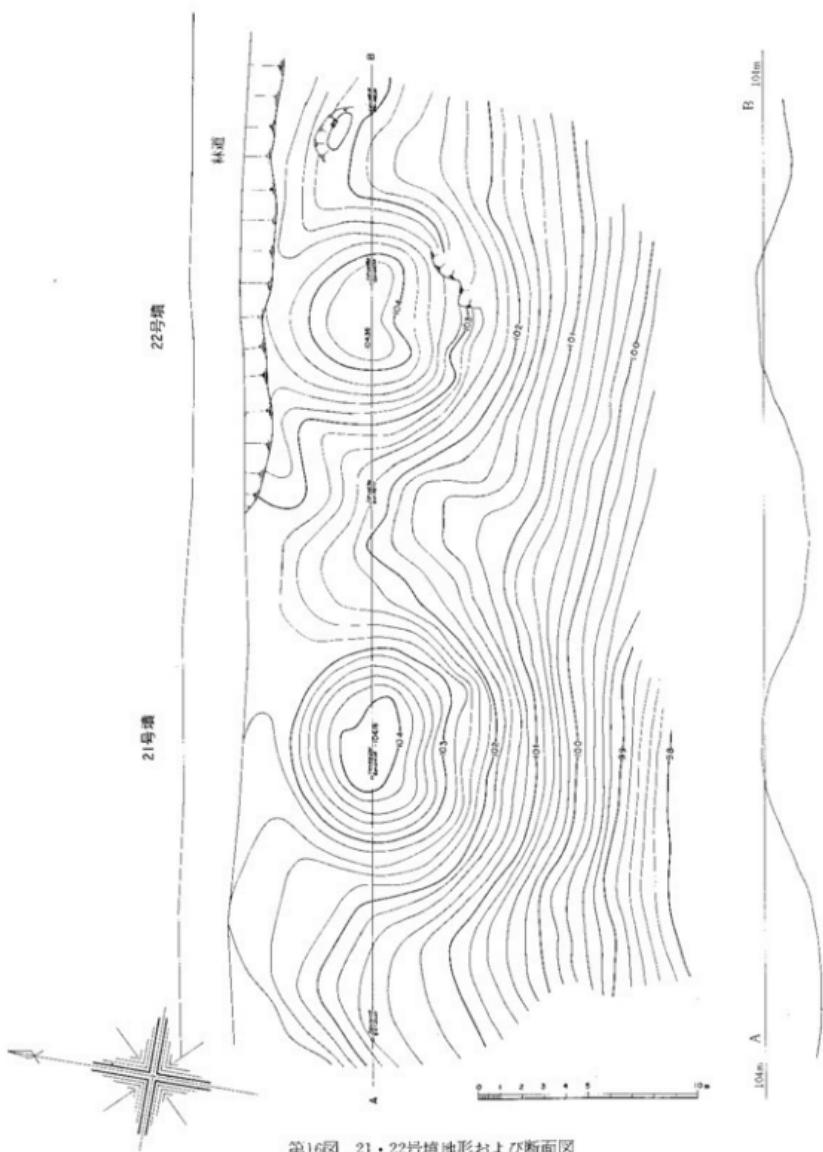
丘陵分水線南側に22号墳と接してみられる形のよく整った直径20~24m、高さ2.20mの円墳である。南側では、盛り土が流れて自然の地形に移行している。未調査の古墳である。

22号墳

21号墳と同形、同大の円墳で、高さは1.80mと若干低い。これまた未調査の古墳である。



第15図 20号墳地形および断面図



第16図 21・22号墳地形および断面図

ま　　と　　め

以上で発掘調査報告を終るが、今回の調査によって18号墳は箱式石棺を主体とし、19号、48号の2基は、横穴式石室の構造をもつ古墳であることが明らかになった。

これらは内容からいって、これまで調査された古墳の埋葬遺構と何ら変るところがなく、全くの同類例ということができる。

したがって、こうしたことに関しての考察、時代考證については、既刊の報告書に詳述されてあるため、ここでは、これら以外の新知見について、概観を要約するにとどめる。

18号墳について

1. 封土表面より埴輪片が出土しているが、出土状態から推して、この古墳には埴輪が樹立されていないことが明らかになった。ところで埴輪をめぐらす古墳は12号墳以外にはみられない。したがって、もしも瓶ヶ盛古墳（12号墳）に使用された埴輪片が何らかの形でこの古墳にばらまかれたとするならば18号墳は12号墳より若干おくれた時期に築造されたものであるということができよう。

2. 箱式石棺は、この古墳群の中では、3号、13号墳の2基に発見されているにすぎなかつたが、この古墳でもみつかり新例を加えたことになる。前2例には、副葬された遺物もなく、年代の推定には県南部各地から出土する箱式石棺の出土から推測して、東北地方の古墳の中期に位置するものと考証されたのであるが、今回の石製模造品の伴葬によって5世紀を下らない時期とみられるに至った。即ち、この古墳から出土した石製模造品の多くは、県内では土師期の南小泉式土器（関東地方における和泉式土器と併行する）を出す遺跡から共存伴出する発見例が多く、土師器の編年からいって5世紀に同定されているという理由による。

3. 石製模造品は祭礼に関係深い遺物とされているが、その発見は棺郭内部から出土したものではなく、棺外部に散乱した状態でみつかっている。これら遺物は曲玉、有孔円板、臼玉に限られ、器物的なものは見当らない。おそらくは埋葬にあたり、何らかの葬祭などが行われ、そのうち埋納されたものであるかもしれない。

4. 鉄鎌の出土は数は少なかったが、従来、無茎鉄鎌の場合、矢柄部をこれにはさんで使用したものとみられていたが、袋状の差込みになる造りのものとしては、例がなく、この種は無茎鉄鎌の新例といえる。

19号、48号墳について

1. 古墳の築造にあたっては、丘陵傾斜面を低平に削平し、それに石室を築造し、周辺の土を盛り上げて石室を覆うという構築法をとっている。

2. 横穴式石室の特徴をあげると、平面形は、やや胴張りの傾向が強いものとなる。玄門は作らず、樋石は19号墳では見られたが、48号墳では見当らない。そして石室と羨道の区別すら明確でなく、この部分に石塊を積上げて通路の役目を断つ形式をとるようである。なお、これら石室の築造にあたっては、持送り式手法をとらず、裏込め石もない脆弱、幼稚な構築技術であったといえそうである。

3. 19号墳では、耳環の出土から複数以上の人物が埋葬されていたことが推定できる。

4. 19号墳からは、須恵器大甕、48号墳からは須恵器提瓶が出土しているが、おそらくは7世紀を中心として使用された型式の器物とみることができよう。

この鷹巣古墳群は片倉氏の調査と最近の4次におよぶ調査によって古墳の外形や、内部主体などにつき明確になって来たが、これにより古墳は長期に亘る日時を経て築造されていったものであることが理解される。

もちろん、これら古墳の被葬者達は、白石盆地を開拓した豪族たちで、支配下の部落、耕地を一望に見おろせるこの地に奥津城を定めたものと思われる。

末筆ではあるが、この調査に当っては東北大学名誉教授伊東信雄先生、白石市文化財保護委員長片倉信光氏のご指導によるところが極めて多かったことを特記し、深甚の謝意を表する。

図 版



写真1. 白石盆地航空写真（国土地理院承認番号昭和47第6152号）

T O - 70 - 8 Y C 8 B - 10



写真2. 鷲巣丘陵全景（達平丘陵より撮影）

写真3. 鷲巣丘陵全景（谷津川遠路より撮影）



写真4.

白石大橋付近より
鷹巣丘陵をみる
(右上職業訓練校)



写真5. 瓶ヶ盛古墳



写真6. 瓶ヶ盛古墳
(かすんでみえるの
が白南盆地
右手の白い建物は
職業訓練校)





写真7. 18号墳
(西より撮影)



写真8. 18号墳
(北東より撮影)



写真9. 18号墳
(20号墳より撮影)

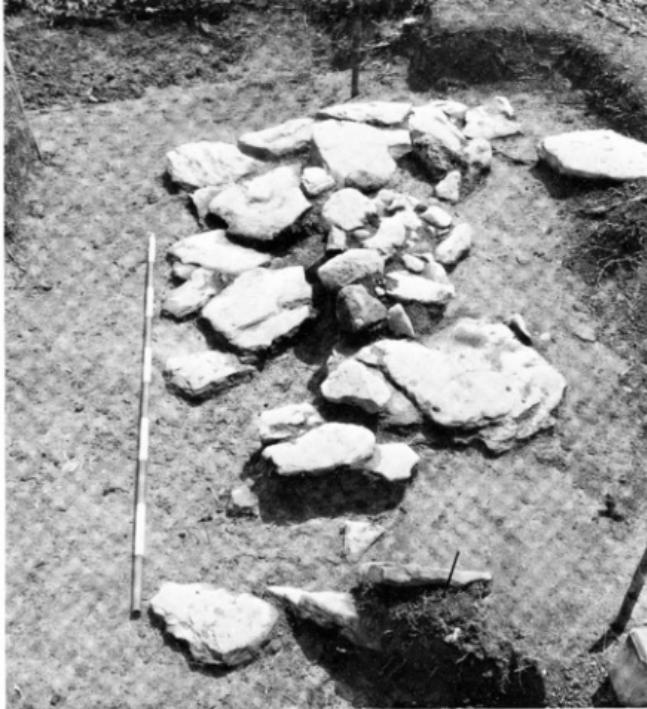


写真10. 18号填箱式石棺
蓋石出土状況

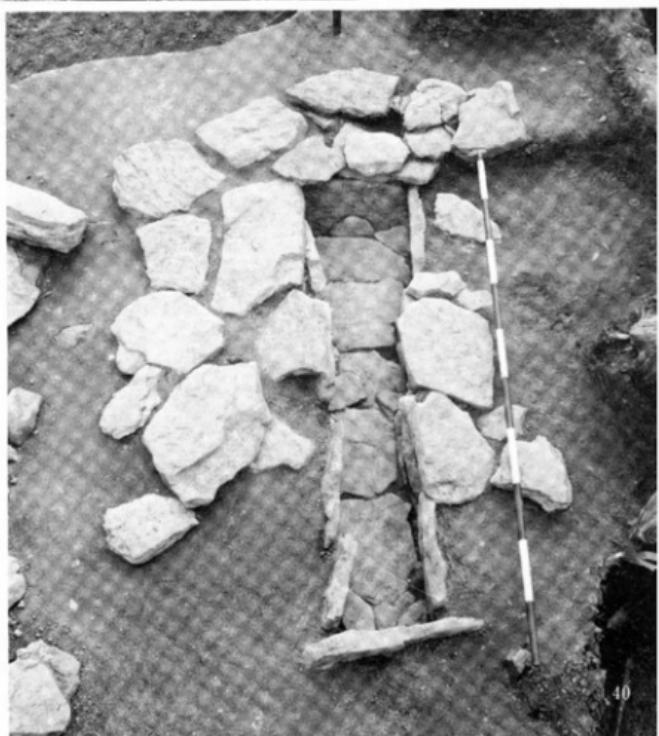


写真11. 18号填箱式石棺

写真14. 18号墳竪式石棺侧面写真



写真12. 18号墳封土断面写真 (中央部石棺出土箇所)

写真13. 18号墳封土断面写真 (むこうの丘陵上の古墳は24号墳)



写真15.

18号墳出土石製模造円板
白玉出土状況



写真16.

18号墳出土土石製模造曲玉
白玉出土状況

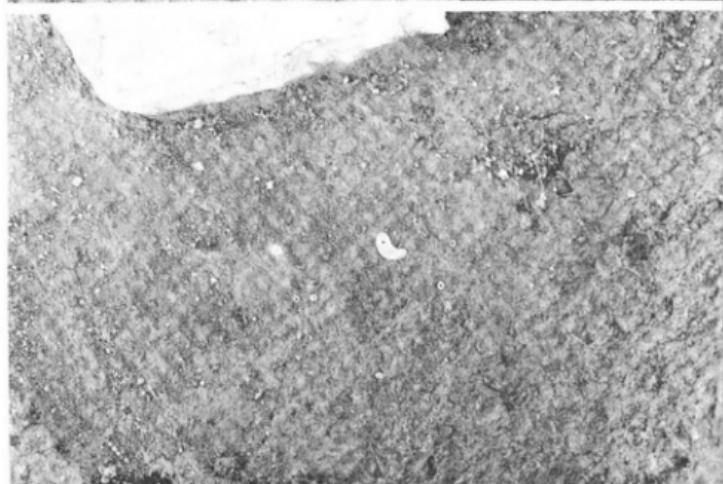


写真17.

18号墳出土石製模造品
(曲玉・有孔円板・白玉)

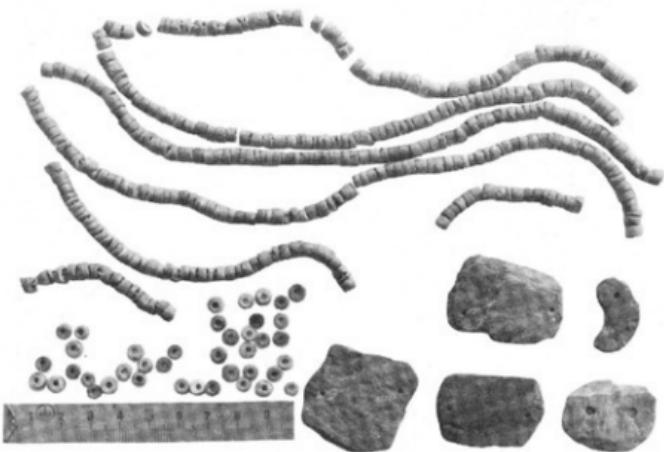




写真18. 18号墳出土鉄鎌(上) 写真19. 18号墳出土埴輪内筒破片(下)
写真20. 48号墳出土直刀(左)



写真21. 19号填横穴式石室全景



写真22. 19号墳全景

写真23. 19号墳の発掘



写真24. 19号墳横穴式石室

写真25.
19号墳内須恵器人甕
出土状況



写真26.
19号墳内刀子出土状況



写真27.
19号墳欄石上出土金環



写真28.
48号墳発掘前の
状況



写真29.
48号墳表土を
剥離した状況



写真30.
48号墳横穴式石室
羨道前部積石状況



真31. 48号墳石室
真32. 48号墳石室



真33.
48号墳直刀出土状況



真34.
48号墳出土
青銅製管状製品



写真35. 版ヶ巒古墳全景（北側より撮影）



写真35. 版ヶ巒古墳全景（北側より撮影）

写真36. 17号墳全景（北側より撮影）

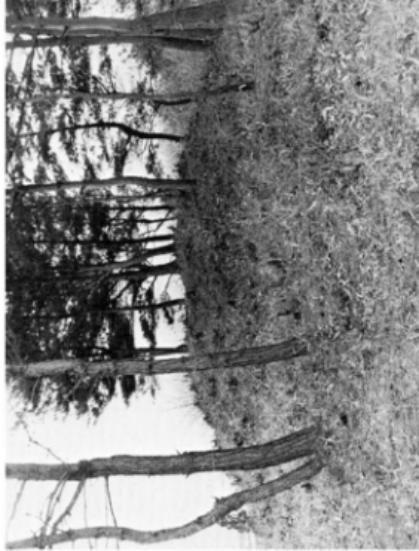


写真38. 20号墳全景
(北側より撮影)



写真39. 21号墳全景
(東側より撮影)



写真40. 22号墳全景
(北西より撮影)



写真41. 24号墳全景

写真42. 25号墳全景

写真43. 19号墳出土須恵器大甕

写真44. 19号墳出土耳環、小玉、刀子

白石市文化財調査報告書第12号
鷹巣古墳群発掘調査概報

昭和47年5月20日 印刷
昭和47年5月31日 発行

発行白石市教育委員会
白石市桜小路35番地
印刷株式会社 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL2564660

